

(公開授業Ⅰ) 第4学年1組 図画工作科学習指導案

授業者 池本佐知子
図工室

1 題材名 校内に発見！学校のようにせい ～場所と作品の組合せの感じをとらえよう～

2 授業構成

(1) 題材の価値と魅力

図画工作科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」である。

本題材は、小学校学習指導要領解説図画工作科編の第3学年及び第4学年の内容「表現」と「鑑賞」領域において次のように位置づけられている。

- A 表現
- (2) 一ア 感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを見つけて表すこと
イ 表したいことや用途などを考えながら、形や色、材料などを生かし、計画を立てるなどして表すこと
ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表し方を考えて表すこと
- B 鑑賞
- (1) 一ア 自分たちの作品や身近な美術作品や制作の過程などを鑑賞して、よさやおもしろさを感じ取ること
イ 感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、いろいろな表し方や材料による感じの違いなどがわかること

中学年の目標には低学年にはなかった「見たこと」が加えられているが、これはこの時期の子どもが視覚によって物事を認識する能力が発達し、「見る」ことをより意識した活動を取り入れることの重要性を考慮したことによるものである。では、4年生における「見る」力とはどのようなものであろうか。見たものの形、色、大きさ、材質などを捉える観察的能力や見た体験をもとにイメージをふくらませ平面や立体で表す再現的能力もあるだろうし、造形物を技術や作者の意図、制作背景などから捉え直す知識的能力も少しずつ身についてくるだろう。本題材では、「見る」と同時に想像を広げて自分なりの意味や価値を見つけて楽しむことをねらいとしている。普段「見て」いるが気にとめていなかった身の回りの環境を、視点をしばったり意図を持たせたりして見直すことで、子どもたちは新しい発見をするだろう。たとえば教室の天井付近には配管が通っており接合部分と壁との間にはわずかなすき間があったり、特別教室の机の下にはものを置くための棚が隠されていたりする。こういった認識していなかった空間は、子どもたちの好奇心を刺激するだろう。また、子どもたちの想像力をかきたてるのは視覚のみではない。子どもたちはその場にあるものに触って材料の性質を確かめたり、回転させたり傾けたりしてバランスを感じたり、空間を移動してその大きさを実感したりするなど視覚以外の感覚も働かせる。子どもたちは体全体でものや空間を感じ、それから受け取ったイメージを大切にしながらものを移動したり見る角度を変えたりして、新たな空間をつくりだし、そのよさやおもしろさを感じ取る力をつけていくだろう。

本題材は身近な場所の雰囲気からそこにいそうな「ようせい」を想像し、紙粘土を中心に制作した作品を使って、新たな空間をつくっていく活動である。学校には、用途に応じて置いてあるもの、広さ、明るさなど、様々な相違点がある。普段何気なく使用している場所であるが、そこにはなんらかの意図があってもものの置き方に法則性があったり、逆に自然物によって人間の意図しない造形の空間が作られていたりする。したがって、子どもが各空間から受け取るイメージも、場所それぞれによって変わってくる。子どもたちは自分なりに各空間から感じ取ったイメージから、その場所に住む「ようせい」を考えていく。対空間、対制作物と二重の鑑賞活動を行い、自分が空間から感じた思いと材料とを結びつけながら制作を進める。制作の過程でも作品をインスピレーションを受

けた場所に持っていく。その場に置くことで、場所の特徴からインスピレーションを受けて形がマイナーチェンジしたり、または自分のイメージとマッチングして空間に溶け込むような感覚を味わったりすることもある。もちろん置き方にもこだわりがあるだろう。作品を納得する形でその場所に設置することで、作品は完成となる。自分がその場所から感じたよさやおもしろさ、つまり自分なりのこだわりを最後まで追究できる題材であるといえる。作品から感じ取る思いは、人によって様々である。今回は別の学校の友達に自分の作品を鑑賞してもらい、その作品にふさわしい場の設定してもらおう。同じ作品でも、鑑賞者の受け取り方でのちがいのおもしろさを感じ取れる題材でもある。

(2) 子どもの思考を高める学びの姿と学びを実現するための具体的な提案

子どもたちは同一の作品を見ても、多彩な感想を表出する。それは、材料の強さや質感からであったり、形や色に由来するものであったり、そこから連想される自らの体験であったりする。それは友だちの作品であっても身近な作品であっても同様で、本学級はのびのびと感じたことを話せる子どもが多い。しかしその発言の中には、その場の単純な思いつきであったり、個人的な経験のみに終始したりすることがある。そこで、本題材では「見る」視点を明確にし、自分が感じたこと、想像したことの根拠をもとにした活動を狙っていきたい。子どもたちは自分が選んだ場所をイメージした「ようせい」を、紙粘土をベースにその場所にある素材や連想する材料を組み合わせでつくる。当然「ようせい」の形、色、材質には場所と関係があり、それを選んだ子どもの意図がある。その「ようせい」を子どもにとって身近な鑑賞の対象である学校内のふさわしい場所や置いたらおもしろそうな場所に、回転させて角度を考えたりつり下げたりしながらよりふさわしい設置の仕方を考えて楽しんで設置し写真を撮っていく。どこで写真を撮るか、アングルはどうするかなど試行錯誤しながら友だちと活動を行う。いろいろな視点からつくりだした空間を味わい、一人一人感じていることを話し合うことで、作品に対する思いを強め、違った視点からのよさやおもしろさを味わうことができる。

さらに「ようせい」は、別の小学校に旅に出る。今回交流する智頭小学校は、町の90%が森林という山間の県境の小学校である。学年2クラスという附属小学校と同程度の人数がいるのだが、比較的県を中心部に近い附属小学校とは違う環境の小学校である。「ようせい」はそこに旅に出て、智頭小学校の好みの場所を訪ねるという設定である。附属小学校の子どもたちは智頭小学校の子どもとペアを組み、それぞれの作品を通して交流を行う。智頭小学校の子どもたちはペアの子どもの「ようせい」を鑑賞し、学校内のふさわしいと感じた場所に「ようせい」を設置する。その様子を写真に撮り、感じたことを書いてペアの子どもに手紙を送る。自分の作品を違う学校の友だちに鑑賞してもらい、感じ取ったことをもとにその作品をふさわしいと感じたところに設置してもらおうという体験は、子どもにとって心躍ることだろう。また、感想に書いてある作品に対する思いに共感したり、自分とは違う感じ方におもしろさを感じたりすることは、学級の友だちとする交流以上だと考える。「ようせい」が旅に出ると同様に、智頭小学校の「ようせい」もまた附属小学校を訪れる。自分とペアの子どもの作品をしっかりと「見て」鑑賞することで、作品がもたらす情報、すなわち色、形、材質などから智頭小学校の「ようせい」に込められた制作者の思いを感じさせたい。また、感じ取ったことをもとに、この「ようせい」だったら附属小学校のこの場所に行くだろうと想像をふくらませ、設置場所を友だちと話し合いながら探す。場所を決めるのも、鑑賞から読み取ったことを根拠にして、楽しみながら想像し活動させたい。

(3) 子どもの協同的な学びの姿と学びを実現するための具体的な提案

今回は、子どもたちが制作した作品が自分の学校と交流校を行き来する。自分の学校のふさわしい場所に作品を設置するのは、はじめに場所を選び、そのイメージから作品を制作しているので難しい。しかし、ここで大切なのはその場所に「ようせい」がいる根拠を自分なりに持つことである。その場所で何をしているのか、どんな様子なのかというイメージは、制作途中で幾度となく繰り返し考えてきたことであるが、実際にその場に作品を置くところでより強固なものになる。つまり、カメラアングルの意識である。「ようせい」の視点に立ってお気に入りの場所を見るのも、学校という日常の中に非日常の瞬間を感じ取ることができる。しかしそれは、一人では活動しにくい。友だちに手伝ってもらって傾きを考えたり小道具を寄り添わせたりすることで、自身の中の「よう

せい」ストーリーは広がっていく。ストーリーを形づくっていくなかで、自然と友だちと関わり、友だちの意見も聞く機会が増えていく。その中には自分では考えつかなかった視点や、自分とは違った感性に出会うことになる。それを通して、多様な価値観、多様な感性を認めることにつながるだろう。

また、訪ねてきた智頭小学校の「ようせい」と向き合うときも同じである。それぞれの作品の名前や特性などプロフィールをつくるが、ペアの相手の作品と向き合うときあえてそれは出さない。作品から感じとった情報をもとに考えさせ、何度も色や形、材質などに注意して「見る」ことで、細かなニュアンスや作者の意図を感じ取らせたいからである。友だちに意見を求めたり解釈を話し合ったりすることで、少しずつ智頭小学校版「ようせい」のストーリーができあがる過程を楽しませたい。また、附属小学校の「ようせい」の時と同様に、想像した智頭小学校の「ようせい」の特徴をもとに友だちと話し合いながら附属小学校のどこを訪ねるか考えて設置していく活動も、場所と作品をつなぐ根拠を意識しながら楽しみながら取り組ませたい。

3 題材の目標

- ・学校に住む「ようせい」と場所との組み合わせや、智頭小学校の「ようせい」と場所との組み合わせを楽しむ。
(造形への関心・意欲・態度)
- ・身近な場所の雰囲気から「附属っ子」の形、色などイメージをふくらませ、つくりたいものにあつた材料や、加工法を考えることができる。
- ・「ようせい」の形、色などからイメージをふくらませ、置いたらおもしろい場所、作品にふさわしい設置の場所を考えることができる。
(発想・構想の能力)
- ・身近材の特徴を生かしながら、場所に合った形、色、接合を工夫してつくることができる。
- ・「ようせい」の設置の仕方や撮影のアングルなどを、工夫することができる。
(創造的な技能)
- ・「ようせい」と場所の関係の工夫を話し合い、よさやおもしろさに気づくことができる。
(鑑賞の能力)

4 学習計画(全8時間) (本時 8/8時間)

第一次

- 第1時 学校のいろいろな風景からそこに住む「ようせい」を想像し、どんな住人なのか、なぜそこにいるのか話し合う。つくりたい「ようせい」の材料や制作方法を考える。
- 第2～4時 様々な場所に置いてみながら、イメージをふくらませて「ようせい」をつくる。

第二次

- 第1時 「ようせい」を住んでいる場所で写真に撮る
- 第2時 「ようせい」のプロフィールを完成させ、写真と合わせて紹介し合う。
- 第3時 附属小学校に来た「ようせい」の訪問先を考え、写真を撮る。
- 第4時 智頭小学校に旅立った自分たちの「ようせい」の様子を話し合い、智頭小学校の友だちに感じたこと、話し合ったことについて手紙を書く。
(本時)

5 本時の学習について

(1) 本時目標

○他者によって設定された自分の作品の写真を見て気づいたことを話し合い、自分の作品の新たな魅力に気づく。

(2) 準備

写真、ワークシート、教材提示装置

(3) 本時の展開 (○教師の意図 ◇協同的な学びへの支援 ◆個の探求への支援)

学 習 活 動	教師の意図・支援
1 附属小学校にきた智頭小学校の「ようせい」の写真を見た、智頭小学校児童の感想を聞く。 ・写真を見て驚いている。 ・ぼくのペアの友だちは、写真をみてどんなことを思ったかな。	○智頭小学校の友だちの、自分の「ようせい」が附属小学校を訪ねている写真を見た反応を見させることで、自分の作品が第三者によって飾られることと、作品に別のみとりをしてもらえるおもしろさへの期待感をもたせ、学習への意欲を高める。 ◆ペアの友だちからの写真を見た感想の手紙を読むことで、自分とは別の視点にふれることへの興味を高める。 ◆智頭小学校の児童が写真を見ている様子のビデオを見することで、作品の向こうにある作者を意識させる。
新たに気づいた自分の作品のおもしろさについて話し合おう。	
2 智頭小学校へ旅立った自分の「ようせい」の写真を見て話し合う。 ・ぼくの「ようせい」が階段にいるよ。 ・私の写真と同じ同じ植木の中にいるね。 ・どうして校庭にいるのかな。 ・智頭小学校の玄関にわたしの「ようせい」がいるけど、玄関の杉を見ているみたいだ。 ・葉っぱの中に横向きで置いてあるけど、この角度から写真を撮っても、色が周りに合っていていいな。	○教師の「ようせい」が、智頭小学校でどこにいるか教材提示装置で示し、附属小学校にいる写真と智頭小学校にいる写真を見せて話し合わせ、本時の課題を意識させる。 ◆自分が撮った写真や考えた「ようせい」プロフィールと比べさせ、智頭小学校の友だちはどんな工夫をしたのかを考える手がかりとする。 ◆単純に「自分の撮った写真と同じ・違う」ということではなく、それぞれのよさについて言及するように助言する。 ◇自由に交流し、場所と「ようせい」の組み合わせのおもしろさを味わわせる。 ◇大きく違っている写真を取り上げ、智頭小学校の友だちが作品をどう受け止めて場所と「ようせい」を組み合わせたのか考えさせたい。 ○写真を比べることで鑑賞者によって受け取り方が違うことに気づかせ、それぞれのよさやおもしろさを味わわせたい。 ※自分の作品の新たな魅力に気づくことができたか。 (鑑賞) (発表・ワークシート)
3 ペアの友だちに手紙を書く。 ①気づきを手紙に書く。 ②手紙を発表する。	○話し合いで気づいたことを、智頭小学校の友だちに対して手紙に書く。 ◇書いた手紙を発表することで、個人の気づきを共有化し、自分の作品のおもしろさに気づく手がかりとさせる。
4 本時のまとめをする。	○自分たちの「ようせい」を集めてみんなで鑑賞し、作品に愛着を持つ。